

## 新しい薬効評価法を用いた治療薬の開発

塩田 倫史<sup>\*,a</sup> 座間味義人<sup>b</sup>

## Drug Development Using Novel Pharmacological Evaluation

Norifumi SHIODA<sup>\*,a</sup> and Yoshito ZAMAMI<sup>b</sup>

<sup>a</sup>Department of Pharmacology, Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Tohoku University, 6-3 Aramaki-Aoba Aoba-ku, Sendai 980-8578, Japan, and <sup>b</sup>Department of Clinical Pharmacy, Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama University, 2-5-1 Shilcata-cho, Okayama City 700-8558, Japan

ここに記載されている総説は、2007年3月30日に富山で開催された日本薬学会127年会での大学院生シンポジウム「新しい薬効評価法を用いた治療薬の開発」という演題で行った発表内容をまとめたものである。

新しい標的分子の探索が進む中で、薬理学には新たな薬効評価法が求められている。特に、新しいメカニズムを有する新薬の開発には、新規でユニークな薬効評価法を確立する必要がある。そこで本シンポジウムでは、オーガナイザーである塩田倫史（東北大）、座間味義人（岡山大）に加え、石田 茂（岡山大）、崔 然吉（愛媛大）、山本 徹（熊本大）、稲倉和幸（福岡大）の薬理学の様々な分野の研究を実践している大学院生が、解析手法において既存の

薬効解析法に捉われずに、動物個体、組織、細胞、さらには分子、遺伝子レベルで新しい評価系の確立に取り込んでいる研究について紹介した。各シンポジストがユニークな薬効評価法を用いて様々な角度から薬物による生体反応、薬理作用を捉えることに着目して研究を進めていたので非常に有意義なものとなった。また大学院生主体のシンポジウムということもあり質問の時間を長めに設定することで活発に討論を交わすことができ、発表者、参加者、ともに大きな刺激を受けた。

本シンポジウム並びに本誌上シンポジウムが若手研究者による薬学会の活性化や新しいメカニズムを有する新薬の創薬に貢献することを期待したい。

<sup>a</sup>東北大学大学院薬学研究科薬理学分野（〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉 6-3）、<sup>b</sup>岡山大学大学院医歯薬学総合研究科臨床薬剤学（〒700-8558 岡山市鹿田町 2-5-1）

\*e-mail: shiotan@mail.pharm.tohoku.ac.jp

日本薬学会第127年会シンポジウムSD6序文